



ヤオ族の研究調査

廣田 律子

アジア研究センター共同研究「湖南省藍山県過山系ヤオ族の言語学的研究」(2013～2015年度)の成果として『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』(2016年)を刊行した後、現在「ヤオ族の儀礼における文献と読誦歌唱法の総合的研究」をテーマに大学の共同研究奨励助成金を得てヤオ族の研究調査を続けている。

ヤオ族にとって移住は神話レベルでも連綿と続けられてきたことと認識されており漂洋過海の神話が伝承されているが、海を渡る過程で遭難の危機に際し、盤王によって救われたとされ、盤王はその後救世主として祭祀の対象とされ続けている。この盤王にかかわる漢字文書『盤王大歌』は、ヤオ族のアイデンティティーの象徴といえる。この『盤王大歌』の所蔵状況の確認及び文書の詠唱の実演の収録を実施している。

9月の調査では、ベトナム北部ソンラー省、タンホア省、ホアビン省を調査し、数種の『盤王大歌』の所蔵を確認し、部分的ではあるが、詠唱を記録に残すことができた。ベトナムのヤオ族(ザオティエン・ザオクワンチェット・ザオドー)の儀礼文化の継承状況は、タイや中国に比べ格段によく、伝承者の世代の幅もあり、日常的に儀礼の実践が絶えることなく繰り返されているといえる。

ベトナムのヤオ族は、かつては山を利用し焼畑する暮らし方をしていたために国境を越え移住を繰り返してきたのだが、すでに漢字文化圏を出て200年以上になると推察される。漢字文化圏を出てもなお、独自に漢字を学習修得し、儀礼の実践の場で漢字文書を読誦詠唱しつつ儀礼を進めるスタイルを保ち続けている。文書にはベトナム音表文字で音や意味が示されているものもあり、日常生活において使われなくなった漢字とその音読と意味の理解の習得に大変熱心であることが見て取れる。

今ではベトナムから国境越えて中国側に儀礼を依

頼されることもしばしばであるという。中国では漢字を使う生活をしながらも、社会の変化の中儀礼を執行できる祭司が減る傾向にあり、祭司の層の厚いベトナムから祭司が出向き、中国のヤオ族の儀礼を担う役を果たしている。もともと山を行き来し、通婚し、親戚関係にあることもあり、自然なことといえる。

中国では儀礼の場に飾られる神の像の描かれた軸(神画)の制作を行なう絵師がいなくなり、フォトコピーを使うか、ベトナムの絵師に依頼し描いてもらうようになっている。

ベトナムにおいても近年絵師になる若者はほとんどおらず、今回サバ周辺で唯一の絵師が病に倒れ、後継者の問題が浮上してきた。絵師は祭司でなければならず、漢字を理解していなければならないとされる。絵師として免許皆伝になるためには、かなりの修行時間が必要である。神画制作は紙作りから始めなければならないとされ、ひと組の神画を仕上げるまでに数カ月を要するとされる。この間種々な禁忌があり、潔斎をとまうと聞く。

ベトナムのヤオ族の男性は、祭司となる最初の通過儀礼の3灯をともし掛灯(クワタン)に始まりさらに7灯また12灯をともし儀礼を経て、祭司としてのランクアップをはかる。絵師は12灯の資格が必要とされる。

もともと祭司として儀礼の実践にかかわることができるようになるためには、最初の段階で、旧正月のファートン(法童)の祭りにおいて、神前で神懸かりのダンスを踊り、その資格があるかどうか判断される。どんなに有名な祭司の息子でもこの神懸かりのダンスが踊れず、祭司を継ぐことができない場合もある。

今回5種の『盤王大歌』を撮影することができた。これまで撮影



大歌の一節を歌ってくれた
ゴクラク県祭司



水害にあったバサット県の村



橋かけ儀礼を行うサバ県祭司

したものとおわせ10種の異なる『盤王大歌』を対照させることにより、ベトナムのヤオ族の『盤王大歌』の原型(プロトタイプ)を再構成することに繋がると考えている。さらに中国及びタイの調査で撮影した『盤王大歌』に加え、バイエルン州立図書館、米国議会図書館及びオックスフォードボールドレアン図書館で撮影した異本との対校も進めることで、『盤王大歌』の系譜も明らかにすることになると確信している。

この取り組みは、漢字を理解できる日本人だからこそ、可能であると思っている。いずれにせよ中国、ベトナム、タイに分散居住しながら同様の漢字文書を使用し、同様の儀礼を行なっているヤオ族だが、程度の差こそあれ、漢字文書とその読誦詠唱法という極めて複雑な儀礼知識の伝承と後継者育成に課題を抱えているといえる。ヤオ



ベトナムラオカイ省ヤオ族風景

族の儀礼知識の価値を評価し、世界人類の文化資源として認知を広げ今後も継承活用がされるために、何らかの貢献ができるように研究を続けていきたいと考えている。

(所員 経営学部教授)



調査報告